

「江戸期マカセ網漁民の墓碑」について

江戸時代に産業が発展して、大阪を中心にした上方地方で農業が盛んに行われるようになり、中でも綿の栽培が盛んに行われるようになりました。その綿の栽培に干した鰯を肥料とした干鰯（ほしか）やイワシを窯で煮て油を搾った残りかすのべ粕（しめかす）など有料の肥料である金肥の需要が増え、そのため大量のイワシが必要となり、摂津・和泉（大阪府）、紀伊（和歌山県）の漁師たちは懸命にイワシ漁を行いました。決められた漁場での漁で、漁師たちの間で激しい競争が起きるようになりました。

「寛永年中(1624～1643)」に関東地方でイワシの大漁が関西地方に伝わり、摂津・和泉（大阪府）、紀伊（和歌山県）の漁師たちは安房・上総・下総（千葉県）、江戸湾（東京湾）に面した三浦半島の野比・下浦・田津浦（田戸・山崎）に、漁場を求めて集団で進出してきました。その中の紀州下津浦（和歌山県下津）の七兵衛と市郎右兵衛門の2名が三浦の下浦でイワシ漁を始め、これが関東における沖巻き網漁の始まりとされ、この漁法には大小の網があり大きい方の網がマカセ網と呼ばれました。

紀州から来た漁師たちは、マカセ網を使用する技術を三浦の漁師たちに伝え三浦で生活をはじめ、漁師たちの中には家族を呼び再び故郷に帰ることなく移住した人たちや、この地で他界した一部の人が三浦の地に埋葬がされました。この人たちの墓を「マカセの墓」と呼びました。

十劫寺(上宮田)に6基残る墓碑には、出身地の紀州下津浦の地名が刻まれ、個人所有の墓碑には、出身地の紀州栖原村、芦内仁左衛門と刻まれています。

三浦で、イワシ漁を営み、生活の場として三浦の人々と交流をしてきたことがマカセの墓の存在からうかがえます。